

# 白黒うさぎの剣戟オンライン

B—506

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

どうも二度目まして。メイン小説の息抜きに作り始めました。

某大尉や、ちよろい女神様がSAOで無双(?)するお話。

ガールズラブは念のため。

## 目次

プロローグ「白いうさぎと黒いうさぎ」	1
デスゲームの始まり	4
波乱	7

## プロローグ 「白いうさぎと黒いうさぎ」

2023年、某国国内、ある人物のチャット欄にて。

ガガつとな『大尉、準備はよろしいですか？』

コマンドー『ちよつと待つてくださいね。今、有線LAN確認します。』

ガガつとな『皆さん準備出来てますから、あとは大尉次第なので、急がず急いで下さい。』

コマンドー『えっ』

ガガつとな『いいから、早く準備して下さい。』

コマンドー『OKです。さあ、行きましょうか。』

「……よし。」

先ほどまでチャットを打っていた薄い空色の髪の彼女、結月一族の真面目枠の1人。本名は伏せるがユーザーネームは「ガガ」。どのゲームでもこれを通してている。

特徴的なのは、他の結月一族が垂れたうさ耳のようなパーカーを被っているのに対してのパーカーのフードに狐のような耳がついていること。

そして、ゲーム「大神」のアマテラスのような赤い装飾が各所にあしらってあること。

「SAOの世界に、こんなフェイスペイント、あるんでしょか。」

どうやら上手く自分を再現出来るか不安なようだ。

「まあ、無かったらその時はその時ですね。行きましょう。」

そしてその風貌から「大神憑き」と呼ばれた少女は、傍らにある「ナーヴギア」を被りました。

「リンク、スタート。」

性別「女性」

ユーザーネーム「G a g a」

パラメータ設定

「ん、重たい剣を持つつもりはありませんがもしものことを考えて、筋力値を少し上げて、あとは素早さに振りますか。」

この時のガガの設定は、後のGGO（ガンゲイルオンライン）で「アジリテイ」と呼ばれることになる設定なのだが、それはまた別のお話。

容姿設定

「リアルの私みたいなフェイスペイントがあるといいのですが…… つと、ありましたね。」

「どうやら無事(?) 見つけられたようだ。」

「あとは、髪の色と、体型ですか。」

「これもお眼鏡にかなったものがあつたらしく、設定はサクサクと進み、

「さあ、いよいよ旅立ってます！ 剣の世界へ！」

システムメッセージ

《welcome to sword world》「G a g a」《

一瞬の闇が視界を覆い、そして

「…… 凄いですねこれ。」

明るくなつた視界に最初に映つたのは、天高く聳える塔と、どこまでも澄んだ青い空。

「お、ようやく来ましたね。」

「ホントだ！ おーい！」

「全く、自分から急かしといて入ってくるのは一番最後ですか……」

「遅いぞー！ 大神憑きー！」

「ガガさん、いらつしやい！」

そして、聞き馴染んだ仲間の声。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
:  
:

## デスゲームの始まり

明るくなった視界に最初に映ったのは、天高く聳える塔と、どこまでも澄んだ青い空。

「お、ようやく来ましたね。」

「ホントだ！おーい！」

「全く、自分から急かしといて入ってくるのは一番最後ですか……」

「遅いぞー！大神憑きー！」

「ガガさん、いらっしやい！」

そして聞こえる、聞き馴染んだ仲間の声。

「全く……せつかく急いでリンクしたのに急かした本人の貴女最後に来ましたね……」

ガガ「ラグですよラグ。良くあるじゃないですか。」

大神憑きことガガと呼ばれる少女に話しかけたのは、ガガと顔がそっくりな少女。ユーザーネームは「ゆかミラン」。愛称は「きゆみー」とか、「キユミー」とか「大尉」とか。元々ガガとそっくりな外見をしていて、ゲームでも何故か似てしまった子1号（というか全員）。といっても、頭には迷彩のキャップ。顔にはドーランを塗っていてよくわかりませんが。そもそもS A Oの世界になんでドーランなんてものがあるのでしょうか。

きゆみー「そもそもですね、ラグがあると分かっているなら……あ、ちよつと！」

お小言から逃げる為に他の人に声をかける。

これまた顔はガガとそっくり。だが、ゆかミランこと「きゆみー」やガガとハッキリ違うのは、そう、言わずもがな「胸」である。（あつ、ちよつと一閃はやめてください！ちよつ、やめ……ギヤアアアアアアア）

元々胸部装甲の薄いはずの一族。だが、何故か。本当に「何故か」

三、四人ほどデカああああい！説明不要っ！の人が出てきてしまったのである。彼女はそんなデカああああい（ryの1人。ユーザーネーム「キンブル」。特徴的なのは、美しい金色の長い髪。服装も髪に合わせ黄色基調になっている。愛称は「女神様」とか「チョコロ神様」とか。愛称の通り、「チョコロい」。こう見えてもお酒が大好きらしい。（未成年じゃないのか……？）

ガガ「女神様、無事に入れたようでなによりです。」

女神「いやあ、なにか起きたらどうしようかと思ってましたハッハッハ。」乾いた笑いである。

ガガ「ところで、貴女に限られた訳ではないですが、武器はどうするんです？流石に、バトルアックスなんて代物は無さそうですね……」

サツと話題を切り替えるあたり、流石、一族1の出来る子（？）であるらしい。

???「心配ご無用！この鍛冶屋をお忘れかね大神憑きちゃん。」

ガガ「りばいあさん、いくらリアルが鍛冶屋だとしてもそれはちよつと厳しいのでは……？」

りばいあ「そこは大丈夫。やり方ほとんど変わらないし、ある程度は自由が効くみたいだから。」

ガガ「あら、そうなんですか。じゃあ、折角なので私の分もお願いできますか？」

りばいあ「お任せ下さいな。ただし、それ相応の報酬は頂きますよ？」

今ガガが話していたのはユーザーネーム「りばいあ」

愛称は「鍛冶屋」とか「りばいあ」とか。

艶やかな紫髪で、身長も顔もガガ達とそっくり。

胸？ねえよそんなもん！（銃声）

腕利きの鍛冶屋だが、システム上無理なもんは無理。

ガガ「流石にその辺は弁えていますよ。しかも、このゲームの仕様からして、私たちのメインウェポンもどきはかなり先になりそうですし。」



りばいあ「いんや？案外そうでもなさそうですよ？」

ガガ「ふえっ？」

りばいあ「パーティ人数無制限なので、数で殴ればワンチャ  
ン……………」

ガガ「ああ、そういう……w」

りばいあ「まあ、ゾンビ戦法が使える『ゲーム』だからこそ出来る  
ことですね。」

そう、これはゲーム。ゲームの、「はずだった。」

皆が一斉に、謎の闘技場のような所へ、転送されるまでは。

---

n e x t

## 波乱

「それにしても、ガガさん再現度高いですねえ。」

りばいあさんと話していると、突如後ろから声をかけられる。

「え、えつと、どちら様ですか?」

と困惑した様子のガガ様。

「えつ、私ですよ。ガガさんふざけてます?」

とどなたか。

と、いうのも。どこからどう見ても りばいあさんと瓜二つ。上から下まで、同じパーツを同じようにいじった、もはやコピー。

「だってりばいあさんはこっちに……あ。」

と自称「真面目」のガガ様。

「どるさんですね。頭に何も乗ってないので誰かと思いましたよ。」

「流石にスク水はありませんでした……」

と、どるさん。

FPSから××なゲームまで何でもこなせるオールラウンダー。大尉の親(頼が厚い悪い)友(達)的存在。普段は頭に植物が乗っている(主にブロッコリー)。時たま頭の上のものを本体扱いされるが、そんなことはない。はず。

ちなみに「どるさん」までが名前なので敬称付きの場合は「どるさ  
んさん」になる。紛らわしい。武器ならなんでも使えるらしい。

「だって今本体無いじゃないですか。」

「そつち!?というか本体はこつち!」

漫才か。

「とにかく!これで全員揃ったんですよ?なら、早速ロマン溢れる  
冒険を——」

突然視界が真っ白になる。

「え?!何これ!?強制ログアウト!」

違う。皆の声はまだ聞こえている。

「発売初期のゲームに良くある視界バグですかね?」

そんなわけない。

「おのれフィクサー！」

いません。

「助けて悪魔憑きさああああん！」

いません。少なくとも現在の所在は分かりません。

「ハッ!?まさかこれは、この私漆黒の墮天使的存在ジ・アンリミテッドギャングスターゆかりを天界に連行する神の光!?!」

何言ってるんだこの人。

自分達以外の困惑した声も聞こえるので、どうやら全ユーザーがなっているようだ。その喧騒は段々と大きく……近くなってきた。そう、近く。

そして突如開ける視界。

「……ここどこ?」

と、青髪の女アバター。顔はこれまた皆とそっくり。名を「シルキー」。どことは言わないが、デカイ。

しつかり度で言えば恐らく一族で一番。だが小さい子が苦手。扱い方が分からないとは本人の談。パルチザン系を扱う。

「ローマのコロッセオみたいですね!こういう感じ好きですよ!」

とオレンジ色の、これまた同じ顔の女アバター。名を「TSUKASA」。らき○すたかな?デカイの三人目。南瓜が大好きで、もはや信仰対象と化している。なかなか狂気を秘めた人で、「これは南瓜キメてますわ。」とはゆかミランの談。

ソード系、主に両剣が好きらしい。

「ソードアートオンラインを購入してくれたプレイヤー諸君。ありがとう。早速だが本ゲームの正式サービスについて説明させていただく。」

声のした方に目を向けると――

そこにはローブを着た巨人の姿。

「そんな……あの壁は……どう見ても50mくらいはありそうだぞ……!」

と、進撃○巨人のようなセリフを吐いたのは、顔に眼帯を付けてる

以外は同じ。名を「独眼竜」。そのままである。抜剣、つまり刀や、大型の剣を好む。中二病ここに極まれり。

話を続けよう。

「このゲーム、ソードアートオンラインは、只今をもって、「ゲームではなくなる」！」

……は？

「ナニイツテンダーオマエー」

「アタマデモウツタンデスカー？」

「ゲームトゲンジツノクベツハツケナキヤダメデスヨー」

「(・×・)アホダナ」

所々からそんな声が聞こえる。

「静粛に。詳しく説明させてもらう。では、まず諸君らのUI（ユーザインターフェース）を見てくれたまえ。本来ならば、ここに。右下にログアウトボタンがある。それを今、消した。」

……はあ!?

「つまり！諸君らは今からログアウト出来なくなった。」

皆口が開いている。勿論彼女らも例外なく。

「さらに、だ。諸君らの残りライフは一になり、ゲーム内で死ぬとナーヴギアから致死量の電撃と熱が加わり、死ぬ。外部から無理やり外そうとしても、同じことが起きる。」

闘技場は静まり返っている。訳が分からない。

「諸君らが今いるのは最下層。ここから各階の迷宮区をクリアし、誰かが百階までたどり着ければ諸君らは解放される。」

これには辛うじて反応できた人がいた。

「百階って……ベータテストじゃロクに上がれなかったんだろ!？」

聞こえていないのか、はたまた聞こえているが無視しているように、巨人が続ける。

「さらに！性別、外見も現実の諸君らと同じになる！この世界を、自分そのまま味わってくれたまえ。」

その宣言とほぼ同時に、全員が光の粒子に包まれる。

粒子が晴れると、確かに。腕の細さ、肌の色、そして髪型から髪色

まで、現実の自分とそう変わらなない。

隣にいた華奢な女性が気弱そうな男性に変わっている。

ますます訳が分からない。

巨人がさらに続ける。

「以上で、本サービスの説明を終了する。では諸君。幸運を祈る。」

巨人が消える。

そして、たつぷりと間が空いた後

「いやあー！」

どこかで悲鳴が上がった。それを皮切りに、先程までの喧騒が復活したように辺りに悲鳴が木霊する。

「つまり、どういうことだっただよよ……」

顔面蒼白になったどるさんが掠れた声で言う。頭には何故か小さな木が乗っている。

「私にもわからん……」

と、同じく顔面蒼白のゆかミラン。顔のドーランが無くなっていく。

「死ぬ……？死ぬ……？ゲームで死ぬと、死ぬ……？」

と、周囲の一族よりかなり小さい、しかし顔はそっくりな女の子が言う。名を「Metro」。愛らしい体躯と発言で「妖精」の渾名が付いている。このゲーム、杖、ないよね……。短剣でいいや……。と本人。

その愛らしい体躯を精一杯丸めて、目に涙を溜め込んでいる。

「死にたくない……」

「と、とにかく、街へ戻りましょう。あそこなら絶対安全ですから。」

と、ガガ。声が震えている。誰だっってこんな状況になれば、心のどこかに傷が入る。

一同は半ば、放心状態で街へ帰還した。

「…で、これからどうするんですか…」  
とゆかミラン。かなり気だるげな顔だ。  
「ドウシヨウモナイナー」

T o b e c o n t i n u e d . . . .